風の舞

槇子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の舞

【Ｎコード】
Ｎ２８４１Ｉ

【作者名】
槇子

【あらすじ】
那梨は舞に魅せられ、女官である舞子になることを夢見る少女。舞子になれる最後の機会の太子即位式での舞子選抜試験を受けるため宮の門をくぐった。
一方、第一王子永璋は太子即位式を前に母親である王妃と東宮殿で親子喧嘩をしていた。
二人は宮の中で出会い、そして二人の間には見えない風の舞が巻き起こる。

えせ中華風・王宮・恋愛あるかもな欲張りファンタジーです。

訂正します：ＳＦ設定は今のところ入りそうにないです。

注

文章がくどいです。

恋愛要素はありますが、それがメインではありません。

皆様の小説を拝見してそう感じましたので注意書きしておきます。

第一章　『舞子』　一

爽やかな風のそよ吹く初夏。都城サビの郊外を始め、国中の農民らが苗をもって田植えに精を出す季節である。しかし、泥にまみれながらの単純作業などというものは、今のところ都城の中では関知されないことだった。商魂たくましい都城の人々は迫る太子即位式に熱狂するのに夢中だったのだ。というのも、隣の火の国に数年遊学中であった太子が隣国の高貴で珍奇な物を多く携え来たのでそれを一部民草にも分け与える、とのお触れが出されたからであった。

とにもかくにも、サビの住民らは都城の大通りを赤、緑、黄の色とりどりの鮮やかな布で飾り立て、花びらを模した紙吹雪を用意し即位式をいまかいまかと待ちわびていた。

その熱気さめやらぬサビの人々と逆行して西通を大股で歩く少女がいた。歳の頃は数え十五、六で、すらっとした身体に淡い桃の上衣と下に若緑の衣を合わせている。少女は肩よりも長く伸ばした黒髪を靡かせ、せっせと足を動かしていた。今日こそは成し遂げて見せる、と少女は拳を胸に当てながら握った。

「お嬢さま！　待ってください！　ああもうっ那梨（ナリ）さま」

少女――那梨――は後ろから追いかけるもう一人の少女の叫びを全く無視した。

「お嬢さま、待ってくださらないと私が怒られちゃいます。お願いだから邸へ帰りましょうよ！　なんでそんなに足が速いんですか。追い付くのも一苦労です」　那梨に追い付いた少女は通せんぼの格好をしながら息をはずませた。その横一直線に結ばれた唇は彼女の確固たる意志を表していた。

「そこを通してちょうだい、里宇（リウ）」

「できません。奥さまからのきびしーい命ですから、いくらお嬢さまの言葉でも通せません」

「里宇はいつからお母さまに仕えるようになったのよ。わたしとの

約束は嘘だったのね」
　那梨はじろっと里宇をねめつけ、それを見た里宇が一瞬怯んだのを那梨は逃さなかった。里宇が気づいたときにはぱっと右へ抜け出して走り出していた。
「那梨さまぁ、今回ばかりは私の言うことを聞いてください！　奥さまが女官だけはダメだと、そうおっしゃったんですってば、もうっ。お嬢さまはあとで叱られる私のこと可哀想に思わないのですか……」
　里宇の言葉尻がどんどんしぼんでいく。もう那梨はすぐ目の前にあった宮の門を通過していた。そして、そこは里宇のような身分の者が主人なしに通してもらえる場所ではなかったのである。
「那梨さまひどい。奥さまに何て言えばいいの。いっそのこと一緒に入っていれば引っ張り出せたかもしれないのに」
　里宇は門の前でいったりきたりしていた。壁は高く男一人の背丈を超えているため里宇には何も見えなかった。
「ああもうっお嬢さまのせいで、奥さまに怒られなきゃいけない。どうしよう」
　里宇は恨めしげに壁を睨んでからきびすを返した。

　宮の中に入り込んだ那梨は、真っ直ぐと目的地を目指して歩いていた。周りでは山吹の衣を着たお針子たちが一生懸命刺繍をしていた。ここは女官らの勤める後宮の近くに位置する詰所で、下位の者たちが仕事をする場である。
　那梨は、お針子たちの見事な手さばきを興味津々にちらほら見ていた。しかし那梨が目指しているのはお針子ではない。彼女が探しているのは中庭の広場で、そこでは――
「そこの者。何をしておる」
　那梨は首をすくめた。目の前には濃緑の上衣を着て髪を結い上げた女性が立っていた。高官を示す出で立ちである。那梨はとっさに頭を下げた。

「針子らの集中した神経を触るような振舞いをしてはならないと申したはずだ」
高官は、ひどく機嫌が悪いらしく眉根をぎゅっと寄せていた。
「申し訳ございません」
「太子即位式の衣装準備を台無しにするような事故があったならば取り返しのつかないことになる。早く持ち場に戻りなさい」
吐き捨てるように言葉を言って去ろうとしたので那梨は一歩近づいて呼び止めた。
「わたくしはこの度の即位式に合わせ募集されました舞子に志願しに参りました。中庭の広場に向かいたいのです」
高官の表情が幾分和らいだような気がした。那梨は勢いをつけて続けた。頬は軽く上気して色づいている。
「太子殿下を舞によってお祝い申し上げたいのです。どうか宜しくお願い申し上げます」
「……広場はあそこの角を右に曲がれば着ける。そこで選抜試験があると聞いている。これ以上針子らを邪魔せず行きなさい」
那梨はお礼を述べて広場に向かった。心なしか、ただ歩いているだけなのに舞をしているみたいに心踊る。
喋られるかどうかの頃から舞のお稽古をしていた。小さい頃、国王陛下の即位式のときの華やかな舞に心奪われた。いつもの練習場とは違って、大勢の人々の真ん中に設けられた高台。きらびやかな衣装を纏い一人として乱れぬ動きの舞子ら。恍惚とした表情で、息づかいまでもが舞となっている。そんな舞を見たのは始めてだった。
こうして那梨は女官見習いに上がれる十の歳からずっと宮の舞子になりたいと想い続け、そして両親の反対を受け十三の歳を超えてしまい見習いにはなれなくなった。
けれども今回は特別だ。太子即位式では人員を増やすために舞子を募集する。舞子に選ばれたらあの場で踊ることができる。しかも、偉い方々の目に止まればそのまま女官として召し抱えられることもあるという。

これは最後の機会だ。那梨はそう思った。次に即位式のような大祭が行われるのはもう何年も先のことで、そのときには那梨は皺のよったただのおばさんになっているはずなのだ。
「相那梨、この機会を絶対逃しちゃだめよ」
那梨は女の子ばかり集まった広場を前に気合いを入れ直していた。
「奥さま、申し訳ありませんっ」
一方里宇はというと、相家の奥方のところでひたいを床に押し付けていた。
「里宇は力の限りお嬢さまをお止めしました。けれどもお嬢さまが」
「もうよい」
奥方はゆっくりと言った。もっと怒られると思っていた里宇は拍子抜けして顔をあげた。
「最近は大人しくしていると思って油断していた。それがあの子の作戦だったのね」
奥方はため息をひとつついた。
「責められるべきは那梨であってあなたではありません」
「でも奥さま……」
里宇はもじもじした。奥方が那梨をどれほど女官にさせたくなかったか知っているだけに奥方が気遣わしく感じられる。
「万が一女官になってしまったら、一生宮の中で暮らして結婚もできず、時には権力争いにだって」
「今回は選抜されてもすぐ女官になるわけではない。己の身の程を知れる機会になるでしょう。一度舞をさせてあげれば満足するかもしれないのだし。
もし万が一女官になってしまったら、そうなってしまったら、それは運命としかいいようがない」
奥方はまたため息をもらした。里宇の言ったことが一番憂慮されるのではあるが、もうひとつ、相家に伝わる言付けが頭の中を巡っている。祖曰く、我が孫らは宮に仕えることなく、王家に関わるこ

と勿れ、と。

「そういえば里宇。あなた確かもう少しで十四になる歳よね」
「はい。その通りです」
「なら大丈夫だわ。女官見習いの振りをして那梨をこっそりみていてちょうだい」
「お、奥さま、そんな無茶な。次の見習い試験は即位式の後だと」
「すぐに手配するからうまくやってくれるわよね」
「奥さまぁ……！」
さすがは母娘、血は争えないと里宇は思うのだった。

第一章　『舞子』　二

龍鈴謡（りゅうれいよう）。

伝説によれば国土開闢のその昔、手首と足首に鈴をつけた初代女王が龍と共に踊ったとされる舞である。舞の基本を一通り習ったなら大抵の人が練習する有名な演目であり、那梨も数えきれない程舞ったことのある馴染みの一曲。だから、選抜試験の課題が龍鈴謡だと聞いたとき、那梨は拍子抜けしたくらいだった。もっと、冷え花の舞や落下流水といった難しい課題が出されるものとばかり思っていたのだ。龍鈴謡なら何があってもとちることはないだろう。

そう思うと、張りつめていた緊張が若干解れて、那梨は周りを見る余裕がもてた。いくつかの建物に囲まれた広場にはざっと見回して二十人ほどの少女が集まっている。鮮やかな真紅と白雪の上品な合わせや、黄色と桃の朗らかな合わせ、白地に薄青と桃の精緻な刺繍をあしらった衣、そして唇には艶やかな紅。どの少女も精一杯お洒落をしてきているのが分かる。ぐるっと見回すと一人の少女がこちらを見ているのに那梨は気づいた。碧に橙の合わせを纏って、くいっと口角が上がった特徴的な唇に、発色の良い紅を指している。

その少女は那梨の視線に笑顔で答えてくれた。笑うと笑窪ができる。正直に言ってかなり可愛い部類の女の子だと思う。色んな女の子を見てきた那梨が認めずにはいられない可愛らしさだった。那梨も彼女にはにかむような笑顔を返したとき、何人かの女官を引き連れた高級女官が広場に入ってきて場が静まり返った。

「ただいまより試験を開始します。呼ばれた者以外は広場の縁まで下がって待っているように。まず一番、景春陽（けいしゅんよう）」

「はい」

「楽士らの音楽に合わせるように。始め！」

楽士の操る横笛からは唸るような節の高音が流れ出し、地響きを表すという太鼓が鳴り始める。景春陽は両手を鋭く上に振りあげ、

しゃん、と鈴を鳴らした。ゆっくりと、土の固さを確かめるように足を滑らせ右に回り始める。肘を引いて指先は胸の位置。どんどんと回転が速まり、後ろにおろした長い髪が空を切る。そしてぐるぐると回って限界の速さまで到達し、ひときわ大きい太鼓の音と足踏みの音、しゃんっという音が重なった。龍鈴謡の有名な一節を景春陽はひとつの狂いもなく舞ってのけた。それどころか、龍鈴謡の龍らしい雄大さと女性らしい繊細さを巧みに躍り分けている。那梨は不意に愕然とした。龍鈴謡などここに集まる志願者たちはとうに知り尽くし躍り尽くした演目であるからこそ。それだからこそ、舞の型以上の何かがこの試験では要求されているのだと、那梨は気がついて驚愕したのだった。

景春陽のあと何人かが呼ばれ、さっき目があった可愛らしい少女、――礼朱貴（らいしゅき）というらしい――は可愛らしさとは裏腹に力強い、かつ、しなやかな舞を披露した。

彼女の次はとうとう那梨の番だった。

「相那梨（そうなり）！」

「はい」

緊張で声が掠れるなど久々の感覚だ。那梨は一歩一歩確かめるように、広場の真ん中に進み出た。この舞一つで合格するか否かが決まり、否となれば夢を完全に諦めなくてはならなくなる。那梨は唇を噛んだ。わたしだって、ここにいる女の子たちに何かしら衝撃を与えることができるはずだ。

一聞しただけでは出鱈目としか思えない複雑な音階を刻む笛の音に、撥を打ち付けた太鼓の音が流れ始める。那梨は目を伏せてそのときを待った。

今だ。

両手を、滑らかに、そして力一杯突き上げる。まるで双龍が一気に空高く舞い上がるかのように。

音楽が一瞬止み、その瞬間、手首につけた鈴の確かな震えが広場全体にこだました。

那梨の精神は、八百年前のはるか国土開闢の時代に遡っていた。那梨の願った通り、那梨の舞がその場にいた者に衝撃を与えたことは間違いなかった。

時は少し遡り、中庭広場で舞子選抜試験が開始されたころ、同じ宮の中にある東宮殿ではちょっとした騒ぎが発生していた。

「殿下、どちらにゆかれるつもりか」

あと四日もすれば太子の座に就く国王の長男の私室に、張りのある美声が響いた。声の主は卓子に座り、頭高く結い上げた髪を右手で押さえる仕草をした。

「どちらに参ろうとも、母上には関係のないことです」

呼び止められた部屋の主はそう言い捨てると扉に手を掛けた。

「なりませぬ。今日こそはそなたに太子拝命の署名をしてもらわねば、この母は一歩たりとも王子の部屋を動かぬつもりです」

王妃はよく手入れされた荒れも染みもない指先を、卓子に置かれた巻物に添えた。王子はうんざりとした表情で振り返った。

「一体誰が太子の座が欲しいなどと言いましたか、母上。これは母上が強引にことを進めたのではありませんか。同い年の嬰明(えいめい)王女も太子となることが出来るというにも関わらず」

この言葉に王妃は卓子に手をついて立ち上がった。

「何を申す！　あの嬰明はそなたより五日遅く生まれたのだ。それにあの子は手に終えぬお転婆で気品もなく王座には到底相応しくない。永璋(えいしょう)、そなたが王となるべきは、天が知り地が知る事実なのですよ！」

永璋は心の中でため息をついた。彼の母親は普段はどちらかといえば聡明で理知的な女性なのだが、ある一点だけは異常に執着するのが玉に”大”傷なのである。

「嬰明王女はもう数え十七。一昨日見た限りではお転婆などではなく、思慮深い女性に育ってましたよ。むしろあのくらい溌剌なほうが、わたしよりよっぽど王に相応しいとも思います」

「永璋っ！」
王妃は今にも倒れ込まんばかりに叫び声をあげた。
「そなたは、そなたという子は、母の前でなんということを！　二度とそのようなことをいうでない！　そなたを王に奉ることが母の悲願なのじゃ」
「それは母の勝手な願いで、わたしの願ったことではありません。それでは失礼します」
永璋は冷ややかにそう言うと扉を通り抜けた。
「待て！　どこへいくのじゃ」
「母上がここに留まるならわたしは出ていくしかないでしょう」
永璋は後ろ手に扉を閉めた。扉越しにも、待つのじゃ、誰か永璋を呼び戻せ！　という神経質な叫び声が聞こえる。
永璋は今度は本当にため息をついて、衛士が母親の騒ぎに気づく前にそそくさと東宮殿を離れた。
火の国にて二年間留守をしている間に彼の母親はひどくなっている気がした。以前から永璋を太子にするといって憚らなかったが、帰国後すぐに太子即位式を準備する程まで思い詰めているとは思ってなかったのだった。
永璋としては、遊学帰国後しばらくは地盤固めをしてから太子に、と考えていた。別に太子になりたくないというわけではない。しかし、このままでは一生母親の言いなりになってしまうのではないかと危惧していた。生母とはいえ、あの神経質にずっと付き合わされていたらこちらが可笑しくなってしまいそうなのだ。無駄な抵抗とは分かっているが、母親と対面すると反抗したくなってしまう。
「永璋さま、王妃陛下をそのままにしてよろしいのですか」
不意に話しかけられ、永璋は立ち止まった。
「いいんだよ。母上にいくら付き合ってもこっちが疲れるだけだ。お前もほっとけ」
「しかし」
「いいからいいから」

永璋の小さい頃からのお付で火の国まで同行した飛彰(ひしょう)は、多少不満げな表情をしたが結局永璋のいうことを聞いて王妃のところへは戻らずに永璋についてきた。生まれてすぐから共に育った飛彰は、なんだかんだいつも永璋に折れてばかりなのである。

「ところで、本当の話、永璋さまはどちらに向かわれているんですか」

「さあな」

とりあえず、東宮殿からまっすぐ西へと宮を横断するような形で永璋は歩いていた。宮の中心は王の執務室の前にあたり、国王に謁見しようと高官たちが待機していたり何かと人目が多いので北に逸れた。これがまた彼らに一旦捕まるとめんどくさいのだ。

永璋はいつの間にか国王の私殿が立ち並ぶ後宮付近に入り込んでいた。いつもなら母親のいる所なので滅多に寄り付かないが、今日はその本人が東宮殿から一歩も離れないと言っていたから安全だろう。彼の母親は言ったことを違えることはない人だった。

「永璋さま後宮に何の用ですか。わたしにはここは落ち着かないんですけど」

「小さい頃はここでよく二人で遊んだじゃないか」

あの頃はもっと背丈がなくて気づかなかったせいか、今見ると後宮の建物は造りが小さくできている。

「もっと西の方にいってみるか」

「嫌ですよ。あっちはあの悪鬼みたいな女官たちがうようよしているんですから」

飛彰は可笑しいくらいに慌てふためいた。永璋もよくは知らないけども、幼い頃女官たちに相手してもらったとき悪鬼のような一面を垣間見たのだという。

それを言うなら女全般が悪鬼のようなものではないかと永璋は思っていた。自らの欲望に捕らわれ、そのためには手段も選ばぬ裏表の激しい、というのが永璋を取り巻く女たちである。戦争よりも後宮を渦巻く権謀術数の方が恐ろしい。

ずんずんと歩いていくと視界が開らけ、不意に先程から流れていた笛と太鼓の音――龍鈴謡――が一際大きくなった。楽士や舞子らを抱える西の宮では普通の光景だが、広場で踊っているのは女官の衣ではなく私服の少女が一人きりだった。

なんとなく興味をそそられて、永璋は広場から見られないように渡殿の端から伺った。

「そういえば、即位式のために舞子と給士を増やすって聞きましたからその選抜でしょうね」

飛彰がぼそっと呟いた。そわそわしているところを見ると本当に落ち着かないのらしい。

「ふぅん」

「当日殿下が気に入る者を選んで女官に召し抱えるのが慣例だそうですよ」

「ふぅん」

永璋は興味なさげに渡殿の欄干に肘をついて、広場にしずしずと進み出る若緑と桃の衣をまとった少女を見下ろした。耳に聞きなれた龍鈴謡の調べが入ってくる。少女は両手を天に突き上げた。しんとした静寂に二つの鈴の音が染み渡る。永璋はかすかに目を見開いた。幼い頃より、舞から音楽から料理から学問に至るまで一流のものに囲まれて育った永璋でも初めて見るのではないかと思うくらい衝撃的な舞だった。膝を柔らかく使いながら、優雅に右に回り始めたかと思うと、あっという間に台風の目のように速くなり、最後に足の裏で地面を打ちつける。永璋は、その少女が両の腕（かいな）でこの大地を囲うようにぐるっと回しそっと手のひらを重ね合わせ、顔を斜めにたおやかに手の上に乗せる最後まで目を離せなかった。右側に垂れた黒髪が初夏の日差しを受けて艶めいていた。

「永璋さま、あちらに衛士らが見えました。逃げなくていいんですか」

くいくいっと飛彰が永璋の裾を引っ張った。視線を上げると確かに衛士らの鎧が柱の間から垣間見える。

「まずいな。逃げるぞ」
永璋はちらっと先ほどの少女を振り返ってから、南の方へと駆け出した。
少女は広場の端の方で、上下する胸に手をあて荒い息を落ち着けようとしていた。
これが、那梨と永璋の出会いであった。

第一章　『舞子』　三

躍り終えた少女らに控え室などは用意されていなかった。試験終了後も少女たちは広場にそのまま残され、一息つくこともできずにやきもきしながら結果を待つ羽目に陥った。

那梨は先ほど龍鈴謡を踊りきったときに既に精魂尽き果てたような心持ちだった。ふらふらの足取りで建物に歩みより、高価な衣が汚れるのも構わず、その石段の上に腰掛けた。

自分なりには、かなり良い出来映えだったと思う。思い出すだけで身体中が感動して震える。今の時期の、風を纏う高く突き抜けた青い空と一心同体になれた気さえした。

那梨はその高揚が堪らなく好きだ。そして踊りきったあとの達成感の中に漂う心地よい疲労も那梨にとっては好ましいものの一つだった。

そんなことを考えながらぼうっとしていたせいか、向かいの方で喧嘩が勃発していることに那梨はすぐには気づけなかった。那梨が分かったのは、試験一番手で那梨に衝撃を与えた少女景春陽が、隣にいた少女に髪を引っ張られたところからだった。

「あんたが先にあたしの衣の裾を踏んづけたのよ！」

髪を引っ張った方の少女が物凄い剣幕で捲し立てた。

「だからすぐに謝ったじゃありませんか」

かたや景春陽は落ち着き払った口調で切り返していた。綺麗に編み上げられていた髪はあちこちに飛び出し、背中に垂らした後ろ髪も変な方向に捩れて、お世辞にも見目美しいとはいえないけれども、景春陽は依然として堂々としていた。

「それとも、わたしの舞に嫉妬でもなさっているの？」

自信たっぷりな景春陽の口振りに相手の少女は更に頭に来たようだ。

「なんなの澄ましちゃって！　あたしこういうのが一番いけ好かな

いっ」
少女は地団駄を踏んだ。どうも神経が昂って抑えきれないようである。再び腕を伸ばし、景春陽の髪を掴もうとした。
「待って」
突然、那梨の隣の方から声がした。この傍迷惑な喧嘩にわざわざ首を突っ込もうとするなんて。那梨は若干ぎょっとして左を向いた。
「景春陽、あなたが済優稟に言い過ぎたような気がするわ」
すっ、と一歩前に進み出たのは、那梨の一つ前に踊った礼朱貴だった。鮮やかな濃い橙色の上衣からすらりと伸びる碧の裳は彼女の一歩に合わせて波打った。
礼朱貴の言葉を聞いたその場の誰しもがぽかんとして彼女の顔を見つめていた。明らかに、意味もなく癇癪を起こしていたのは済優稟の方だということが途中参加の那梨にも読み取れる程である。
「済優稟も、春陽は謝ったということだし、どうか怒りを収めてくださらない？　わたくしたち、舞をしにここに来たのであって、喧嘩をしに集ったわけではないのですもの」
礼朱貴は微笑んだ。那梨が特徴的だと思った口角はやはりきゅっと上がっていて、可愛らしさの中に賢さも垣間見える。
「わたくしの顔に免じて、お願いしますわ」
済優稟と呼ばれた少女は未だ興奮覚めやらぬ様子ではあったが、周りの白けた雰囲気に気づいて気圧されてか、随分落ち着いたようだった。景春陽を一瞥するとプイッと反対側を向いた。
「あたしは、あなたのそのきらきらしい高価そうな衣にでも免じて引き下がるわよ」
そう吐き捨てて済優稟はさっさと広場を後にした。試験の結果発表を待つ気はないのらしい。どうも、済優稟が自分の舞が太刀打ちできそうもないのが分かって癇癪を起こしたというのが真相のようだ。ある意味では、それだけ舞に思い入れがあったのだとも考えられるけれど、人の髪まで引っ掻き回すなんて那梨の理解を超えていた。那梨だったら到底この喧嘩を仲裁することはできそうにもない。

那梨はこの場を丸く納めてしまった礼朱貴を改めて見た。額の切り揃えられた前髪は黒く、その下にある眉はくっきりと柳のように山を描き、小振りな鼻、くいっと引き気味の唇は形良く顔に収まっている。

「そんなに見つめられては困りますわ」

礼朱貴は那梨の視線に気づくとすぐ、石段に近寄ってきて、自然な所作で那梨の隣に腰掛けた。

「ごめんなさい。じろじろ見る気はなかったのよ」

那梨は、気付かれる程見つめてたかしら、と考えて恥ずかしくなり目を伏せた。

「ただあなたが上手くこの場を収めたのがすごいと思って」

礼朱貴は、ああそれのこと、と声を漏らした。

「信じられないくらい野蛮な方でした。女性の髪を引っ張るなんて。静かにご退場願うのが相当ですわ」

彼女はにっこり微笑んだ。

「ああいう方は態度一つで生まれも育ちも多寡が知れるもの。身に付けていたものもそこそこでしたし」

那梨は伏せていた顔をあげて礼朱貴を見た。相変わらず両頬には笑窪が浮かび、可愛らしい笑顔である。しかし、反面その中身はかなり厳しい性格なのでは、と那梨は思った。朱貴は、内心では信じられないくらい野蛮だと思う優稟を持ち上げてみせたのだ。

「その点、あなたは衣の生地も仕立ても一流のものですし、上品ですし。もしや、生家は大商人の――」

朱貴がそこまで問いかけたとき、再び高級女官を表す濃緑の衣が広場に現れ、その場は一気に静まり返った。

結果発表の時は那梨が思ったよりも早く訪れたようだった。

「これより選抜試験の結果を発表する」

女官は隣の女性から巻物を受け取ると、するすると開いた。皆が皆その巻物をじっと見つめる中、一陣の風が吹き抜けた。

「今から呼ぶ者は前に出るように」
那梨はお腹の上で手を組んで固唾を飲んだ。
「合格者、景春陽」
広場中に落胆とも安心ともとれるため息が広がった。皆順当だと思っているのだろう。景春陽は、はい、ときびきび答えると、出来るだけ梳き直しただろう髪を靡かせて前に進み出た。
「次、西蘭華」
向こう側から返事が聞こえ、背のすらっとした少女が進み出た。誇らしげに顎を上げている。
「次、礼朱貴」
「はい」
朱貴は那梨に笑いかけてから女官の方に向かった。
「最後に――、相那梨。
以上四名を合格とする」
那梨は自分の心臓が急に高鳴るのが分かった。するすると巻き直している女官の姿が、まるで遠くの世界での出来事のようにのんびり動いて見える。
那梨は、心のどこかでは、自分は必ず受かっているはずだとなんとなく思っている部分があった。だから、驚いた、というよりは、呼ばれて安心したというのが彼女の正直な気持ちだった。
「相那梨、早く前に出なさい！」
巻物を受け取った女官の促す声が鋭く飛んだ。
「は、はい」
那梨は我に返り慌てて返事をして、少女らの間から抜け出た。既に前に並んでいた礼朱貴の隣に並ぶと、朱貴はちらっとこちらを見遣ってきた。
二人は互いの煌めく瞳の中に同じものを宿しているのを見たような気がした。何かを一心に目指す者の煌めきとでも言うべきか――。朱貴と目があったとき那梨は急に嬉しさが込み上げてきた。この相那梨が受かったのだ。あの即位式で、いつか見た舞をこの身で踊れ

るのだ。
「お前たちは、即位式での舞を誠心誠意務めあげるように」
「かしこまりました」
四人は見事に唱和し、そろって頭を垂れた。
こうして那梨はやっと、舞子としての第一歩を踏み出したのである。

夜の帳が降りて民草が仕事を終え眠りにつく頃であっても、寝ずの番の隣で煌々と明かりが燃やされ、それ自体は眠らないのが宮というところだった。
那梨は西宮の一郭に与えられた部屋の戸をそっと開けると、外へ抜け出した。自分でも気づかなかったけれど、意外と興奮しているのか中々寝付けなかったのだ。この辺りを一回り散策しようと、那梨は左の方へ歩き出した。
本格的な夏を前にして、夜の風はまだ少しひんやりとしている。それは那梨の火照った頬の熱をじんわり奪っていった。
両手を軽く広げて肺の奥深くまで空気を送り込むように息を吸い込んで、今度はゆっくりと吐き出していく。目をつぶって、心臓の鼓動に耳を済ませながら何回か深呼吸していくうちに、なんだか不思議と安心してくる気がする。
「――那梨さま」
不意に自分の名をを呼ぶ声がした。那梨は体を固くしてきょろきょろと辺りをを見回した。しかし、篝火が遠いために陰になっているこの暗闇の中からは、人影を見いだすことができなかった。
「お嬢さま、こっちです」
押し殺した、しかし那梨にとっては聞き慣れた声が再び聞こえてきた。
「里宇？　里宇の声よね」
そう問い返すと、くいっと衣の袖が引っ張られた。
「お嬢さまってば、やっぱり舞子に選ばれたんですね」

「里宇！」
那梨は目の前に現れた里宇を抱きしめた。邸で使っている香の匂いがふわっと香る。
「どうしてここにいるの」
女官が起臥寝食する西宮はみだりに外の者が入ることは許されていない。門番やすべての女官の目を盗んで入り込むなど不可能に近いのだ。
「奥さまからの命です。私も今や女官見習いなんですから。下っぱの下っぱですけども」
「お母さまったら、無茶したのね」
那梨は苦笑した。誰も口には出さないけれど、自分たち母娘が実は似ていることは那梨も気づいていた。一度言い出すとやり通そうとするところなんか特にそうなのである。
「それよりもお嬢さま、舞の方はどうですか。もう練習とかしました？　他の舞子と仲良くしてます？」
「そうね。早速午後には即位式の舞の構成を一通り説明してもらって、他の班を見学したりしたわ」
那梨は充実した一日を思い出してにっこりと笑った。
「一緒に合格した人の中で、相部屋になった子と結構仲良くなったのよ。里宇やお母さまに心配されなくてもちゃんとやっていけるわ。それに、」
那梨は一端言葉を区切った。
「里宇が反対しようとお母さまが反対しようと、わたしは女官に選ばれるように頑張るだけよ」
里宇は何も言わなかった。本当は暗がりの中でちょっと困ったように眉を八の字にしていたけれど、那梨はそれに気づかなかった。
「八歳のときからそれだけを考えてきたのだもの。あと少しのところで女官になれるかもしれないって思うとどきどきする。女官になれば宮にしか伝わっていない演目も見れるのよ」
「お嬢さま。奥さまはとりあえず那梨さまの様子を見守りなさいと

おっしゃいました。だから里宇は反対はしません。でも色々と気を付けてください。女官になった友達が里帰りするときに、宮って結構危ないところって言ってたんです」
「わかったわ。ありがとう」
那梨は微笑んだ。幼少期から一緒に過ごしたこの少女の長ったらしい口上を聞くと、那梨にとってなんだかほっとできる気がするのだ。
「そろそろ帰るわね。里宇も頑張るのよ」
「もちろんです」
那梨は軽やかな足取りで元来た道を戻っていった。
残された里宇は、そんな那梨の姿が闇に紛れて見えなくなるまで見守っていた。そして、自分も与えられた相部屋に帰ろうと一歩踏み出したとき、脇の茂みから突如として現れた人影に吃驚して息を飲んだ。
「なるほど。相商人の娘か」
里宇は何も言えずただ頭を下げているしかなかった。那梨が都城サビ一の商人の娘であり、里宇が相家に仕える侍女だということはなるべく伏せていた方がよかったはずのに……里宇は唇を咬んだ。
「生活に困っているわけでもないのに女官を目指すなんて物好きな」
そう言って里宇をしげしげと見た後、その者はまた突如としてふらっとその場を去った。どうやら偶々居合わせただけだったようだ。
しかし里宇は心穏やかではなかった。里宇が昼間に女官見習いとして受けた教育が間違ってなければ、今の人は第一王子永璋、数日もすれば太子になられるお方だったのだ。

第一章　『舞子』　四

どこか近くの衣ずれの音を聞きながら那梨は目を覚ました。この時期なら柔らかく差し込んでいるはずの陽光は、掛布から腕を出してみても感じられない。那梨は慌てて飛び起きた。隣で帯を締めている最中だった朱貴が軽く目を見はったのにも気づかず、障子扉を見て息を呑む。

「曇りだわ」

今日の夜が本番だというのに、天候は芳しくない様子で那梨は気を落とした。

「太子殿下の即位式のためにそこまで心配するなんてご立派ですわ。さすが女官志望の方は違いますわね」

もう既に衣服を調え終えて鏡台の前に座った朱貴がからかうような調子で言った。

「まあ、朱貴ったら。そんな大層なものではないのよ」

「わかっているわ。あなたがこの日の舞をどんなに良いものにしたいと望んでいるか、この半月で痛い程感じましたもの」

振り返られて、口角のきゅっとしまった唇から発せられた言葉に那梨は頬を紅くした。

完璧であるのみならず、一点の曇りもなく冴えわたり、それでいて心揺さぶられる舞を目指すことーー。今まで家族には理解してもらえなかったことを（この点については里宇も例外ではなかった）、目の前の少女は難なく理解してくれる。那梨にはそれが、自分でも意外な程嬉しく思うのだった。

そんな那梨の様子を満足げに眺めてから朱貴は紅をさす作業に立ち戻った。なんでもできそうなこの同室の少女は、朝の衣替えや化粧は得手でないとみえ、那梨よりも早くに起きているにもかかわらず、仕上がるのは那梨とほとんど変わりなかった。こういう意外な可愛らしい欠点を持っていることも、那梨が親近感を持てる理由

の一つだった。
「それにしても、てっきり寝坊したので慌てて起き上がったのかと思いました。今日はわたくしの方が早く仕度を済ませられそうですわね、お寝坊さん」
背中越しに告げられた言葉に那梨は再び息を呑んだ。たしかに、陽ざしがない分気づきにくかったが、外の騒がしさからいっていつもより遅い時間のようだった。
「もう！　それを早く言って欲しかったわ」
那梨は布団を素早く畳み始めた。部屋の壁にかかる姿見には、まだ寝間着姿であちこちにはねた髪を揺らしながら掛布と格闘している那梨が映っており、大変滑稽なことになっていた。
「それと、今日は夕方には晴れるそうよ。風の具合がそうだと言っていたわ。春陽はなんでも詳しいのね」
朱貴は、那梨の慌ただしい動きを背中で感じつつ、首元に粉をはたきながら微笑んでいた。朱貴自身はそれ程思い入れがあったわけでもない今夜の舞であったが、寝食共にするこの少女のおかげであろうか、なんだか楽しみになってきていたのだった。きっと、人生であまり味わうことのできない高揚感が自分を待ち受けているはず。
そういえば、と朱貴は思い出した。選抜試験のときには、高価な衣や上品な佇まいを超えて那梨に何かを感じとって、めったに話しかけない同年代の女子に声をかけたような気がする。あのときわたくしは何を思ったのかしら。
そう考えると、益々、那梨という少女に不思議な魅力を感じずにはいられない朱貴であった。
景春陽の予言は当たったと言って差し支えないだろう。昼の間はちらちらとしか顔を見せなかった太陽は、今まさに山際に吸い込まれようとしており、頭上には雲に邪魔されることなく星々が瞬いている。

織部の者たちが細心の注意を払って織り上げた薄衣仕立ての衣裳は少々防寒に足りていなかったが、興奮し切っている那梨は構わなかった。手と足の末端まで血液が廻って、ぴりぴりと痛いくらいだ。

この柱の脇から伸びる階段の先は篝火に囲まれた演台になっており、つい先ほどまで国王陛下が永璋第一王子に太子の位を徴す冠を授ける儀式が執り行われていた。たった今は、太子となった永璋王子が神々に豊穣と無災を希う祝詞を奉納しているところである。低く澄んだ声が、古代の言葉を紡ぎ出し始めてから随分時間が経っている。すなわち、那梨の出番がもうあと少しのところまで迫っている。

中々深い呼吸ができず変な具合になっている那梨の耳元で朱貴が囁いた。

「いよいよですわ」

那梨はこくっと頷くことしかできなかった。那梨と朱貴が見つめ合うようにしている様子を景春陽が一瞥してそっぽを向いた。舞の技術は素晴らしいが、どうもこの少女は他の女の子たちと馴染めない質なのらしかった。それを気どって朱貴は春陽へと視線を移した。

「春陽も一緒にわたくしたちの舞の行く末を見届けましょう。もちろん蘭華もよ。一人でも欠けたら天継の四人舞は成り立ちませんもの」

朱貴を可愛らしくも利発に見せる口元が笑みをかたちどる。

彼女の笑顔に呼応して春陽と蘭華も頷いたとき、一際大きい銅鑼の音が辺りに鳴り響いた。下女が那梨たちに進みいでるよう合図を送っている。

ゆっくりと几帳面に等間隔に打ち鳴らされる銅鑼に促されて、那梨、朱貴、春陽、蘭華の四人は横一列に並んで階段を一歩一歩踏みしめて昇っていく。左右に居並ぶ高官らの間を進みながら那梨は目の前の高殿に垂れる御簾を真っ直ぐ見据えていた。あの御簾の向こうには国王王妃両陛下並びに太子殿下が鎮座せられる。もし、太

子殿下がわたしを気に入れられて取り立ててくださったら。那梨はそのことだけを考えていた。そうしたら、この宮で永く女官として舞に専念できるのだ。

いつの間にか、足は最後の段を踏んでいた。太子即位式の舞は天継の四人舞から始まり最後には総勢三十三人の団舞となる。四人は御簾に向かって最高礼をしてから四方の隅へと散らばった。

少し高く造られた演台から都城を見張らせる位置についた那梨は、眼前に広がった光景に、さっきまで太子殿下のことを考えていたなど吹き飛んでしまった。

見渡す限りの人、人、人ーー。

この都城にはこんなにもの多くの人々が暮らしているのだろうか、と疑う程に、幾つもの物見櫓のなかで、広場のなかで、人々が熱気に包まれて溢れ返ってごった返しているのが見える。その数えきれない人々は皆那梨たちの舞を見逃しまいとこちらを見ている。食い入るように。心踊らせながら。

ああ、と心の中で息をつく。

あの中のどこかに、小さいわたしが居るのだ。

那梨は急にそんな気がしてきた。

感動に胸をふくらませて、抱えきれないほどの夢を抱いた小さいあの子が心踊らせて食い入るように見ている。

あのときのわたしのためにこそ、わたしは今夜この舞を踊るのだ。

そう腑に落ちたとき、舞の始まりを告げる二連銅鑼が鳴った。

第一章　『舞子』　四（後書き）

忙しくすっかりこの小説を忘れておりましたが、こんな風に（設定資料が発掘されたなどで）思い出したときに書くようにしようと思いました。宜しくお願い致します。

第二章　『太子』　一

盃を干しても喉の渇きは癒されなかった。長い口上のあとである。やはり酒精の入ったものは悉く甘いのでなんの足しにもならない。永璋は、濃い緑の衣を纏った女官に清水を持ってくるよう申しつけた。とはいっても、彼女自ら水を汲んでくるわけではない。彼女は彼女付きの女官に申しつけて、その女官は見習い女官に申しつけて、見習い女官が下女に申しつけて、下男が下女の代わりに汲んであげるのである。後宮とは、このようになんとも面白可笑しく成り立っている。そう、今、演台に昇ってきた四人の舞子もまた後宮という世界に片足を突っ込んだ女たちである。永璋はなんの興味もなしに彼女らを見下ろしていた。正直、先程の祝詞があまりにも長すぎて疲れが一気に押し寄せてきており、周りのことはどうでもよい気持ちになってしまっている。しかし、それがないにしても永璋が神経を消耗してしまう原因は隣で豪奢な椅子に凭れかかっている女性に負うところが大きい。その女性は、すなわち王妃陛下であるのだが、永璋が祝詞を終えて座についてからもう盃を仰ぐこと三度を数えており、よほど機嫌が良いように見受けられる。無理もない。自らの息子が立太子されることはつまり、国母となれることが約束されたようなものであるからだ。

永璋は自分の無駄な抵抗がまかり通るなどとは思っていなかった。単に自分が従順でないことを母親にも承知しておいて欲しいと思ったに過ぎない。

むしろ、嬰明王女側の抵抗を押し切って太子即位まで漕ぎ着けたことが彼女を女傑ならしめているような気がする。そう意味で永璋は母親への賛辞を惜しまない。

「太子、立派な祝詞であった。母はそなたの一挙一動に震えを感じる程誇らしくて仕方のうて」

そう言いながらも、もう一杯仰ぐ。このように呑める程、酒に強か

ったとは記憶にないが、呂律がしっかりしているところを見ると、思ったより酔いは回っていないようである。
「母上は大変ご満足の様子とお見受けします」
「そなたは満足ではないと言いたいのであろう。もうよい。それは母も承知のこと。大事なことはそなたが太子であるという事実なのです」
王妃陛下は目を細めて自分の息子を見遣った。
「そういえば、今、下にいる四人のうちそなたが召しかかえるべきおなごを選んでおいてある。一人は礼朱貴、もう一人は景春陽。いずれも見目よし、能力よし、胆力よしの三拍子、そなたの気にいることだろう」
母親の言葉に、永璋はちらっと演台を見た。ちょうど四人の舞子が薄衣をたなびかせて四方に散らばるところであった。
「母上の、」
お望みに適うままに、と言おうとしたとき、不意に半月程前の記憶が去来した。龍鈴謡の笛の調べに舞う桃と緑の少女の姿と、闇夜の中侍女と密会して女官になることを切望していた少女の姿。あの娘は、今あの演台で舞っているのではないか。さっきは一瞥をくれたのみだったが、今度はしっかりと四人の舞子を見る。彼女らは銅鑼と太鼓に合わせてくるくると円を描いている。残念ながら、どの舞子があの娘かは遠目には判別できなかった。しかし、あの龍鈴謡を見せてくれた少女の願いを叶えてやりたいという気持ちがむくむくと膨らんでいる。
「母上の推す娘の他に、わたしからも、推挙したい者がいます」
永璋はゆっくりと言葉を紡ぎ直した。
「なるほど。そなたも自身の意見を持つようになったと母に示したいのであろう。よい、申してみよ」
「相家の者です。女官を切望しているようですから、よく仕えてくれることでしょう」
そう永璋が言うと、母親は盃の酒を手に持ったまま息子の顔を目を

細めて眺めた。永璋はその視線が昔から変わっていないこと、小さい頃その視線が好きになれなかったことを思い出した。だが、今は母の視線に耐えうるまでに一応成長できたようだ。先に視線を反らしたのは母親の方だった。盃に口を付け、緩慢な仕草で流し込む。白い喉元が僅かに動くのが見え、同時に、その首に齢の徴しが浮かんでいるのも見て取れた。

「そなたがいまだかつて、女人を所望したことがあったであろうか。もう、そなたも幼き頃とは違う。母もそれは認めよう」

永璋の母親は、女官に酒を持ってくるよう手をひらひらと舞わせた。

「よろしい。母も、相商人の娘に興味がないわけではない。そなたの好きにするがよい」

ここ数日の永璋の振る舞いをみての母なりの譲歩なのだろう。永璋を王位につけることへの執念を除けばこのように話し合える人なのに、だからこその玉に瑕、なのである。

「かようなご寛容に感謝します。では、あの礼家の娘と入れ替えてもいいでしょうか。あの娘は昔から得手ではないゆえ」

永璋は何か昔のことを思い出してか、しかめっ面になった。

「それはならぬ」

母親の声調に厳しさが舞い戻る。

「景春陽と替えるのであれば許そう。しかし、礼家の娘は、父親の命に背き、その覚悟を証明しようと、生まれてこの方衣も自ら調えたこともないのに後宮で仕えることもしてみせたのだぞえ。女官に召し抱えておきなさい。宗家に嫁がれても困るゆえ」

なるほど、と永璋は思った。母は、政治の感性に長けている。永璋が遊学で国をあけている間、猛追しただろう嬰明に競り勝ち今日の即位式に漕ぎ着けたことを見るだけでもそれが分かる。二年間火の国で様々な政治学を学び、かの国の帝王学を傍から見てきたから以前よりもそう評価できる。母は、その能力の高さ故に、自らが直系王族でなく、王位継承権のない傍系であることを恨み辛みして生きてきており、自らの分身に王位を継がせることが唯一の希望となっ

たのだ。
「母上のお考えは分かりました。礼家と相家の娘を召しましょう」
「歴代の太子の中でも、これだけの娘らを女官に召し上げた方はおるまい。太子妃の選抜も華々しくしなければなるまい」
と、母親は、突然盃を取り落とした。艶めいた衣の上をするすると滑っていくのを永璋はとっさに受け止めた。幸い舞の邪魔になる音はたてずに済んだようだ。
「少し酒が過ぎたのではありませんか。奥の宮に下がられたほうが宜しいのでは」
額に手をあて眉間にしわを寄せる母親の手を取って立ち上がるよう促した。女官に合図すると、二人ばかりが素早く寄ってきて母親を抱えて高見の席から連れ出して行った。その気配がなくなるまで見送った永璋は、すれ違いに入ってきた女官から水を満たした杯を受け取り自分の席に戻って演台を見降ろした。
ちょうど、四人舞の盛り上がるところへ差し掛かっていたところだった。種々の太鼓の鳴りと、笛の音が競うように響き合っている。一人の舞子が一歩前へ進みいで一際複雑な動きを見せ始めた。後ろで踊る三人と比べ、切れの良さ、しなやかさ、たおやかさは及ばないように見えた。が、永璋はその舞子の表情が見えたとき、思いもよらず肌が粟立った。あの舞子が、あのとき見た相那梨に違いない。瞳は涙を浮かべたように篝火を受けて輝いている。火の色か、血の色か、分からない程に高揚した頬。唇は少し開け放たれている。と思ったら、今度は凄まじい形相に豹変して、目はどこか一点を睨めつけ、歯はこれでもかと食い縛られている。かと思えば、またあの恍惚とした表情が現れるのだった。
それから永璋は相那梨の動きを目で追わずには居られなかった。

第二章　『太子』　二

タンタカタン、タンタカタン。
細い撥から発せられる小気味良い音が流れる。
ダンダカダン、ダンダカダン。
それを追うように、足踏みの音が続く。
下手すれば、足がもつれてしまいそうな複雑な動きを、その舞子は違うことなくやってのけた。
ウォーッと地面を這うような金笛の伸びる声に、腕を振り上げて応える。
手首から括り付けられた細長い衣が宙を舞う。
それは、宙から落ちてくるよりも前に、再びふわっと打ち上げられる。
ダンッ。
という一際大きな踏みつける音が一拍、トントントンと軽やかな歩みが三拍。何度も何度も繰り返される抑揚に、心の臓が呼応して高鳴る。
身体中が何かを突き破りそうな気持ちに駆られる。このまま、天にまで駆けて昇れそうだ。
自分で息をしてるのか、舞が息をさせているのか、益々混乱していく意識の中ではそれの区別すらつかない。
ダンッ。
この足踏みは、人の子らを睨みつける荒ぶる神の怒りの鉄槌だ。
ダンッ。
これは、天帝のとりなしを請う鎮めの巫女の足跡。
その後、ふんわりと、舞は調子を変える。人の子らを束ねる者が定められた徴である。
左へ、右へ、腕を広げて、この地上の者らを指し示す。
もはや、自らに天帝が舞い降りたかのような奇妙な心地がする。

そこから三十三人舞が終わるまでの記憶はない。気づいていたらすべてが終わっておりーー。

意識が戻った那梨は、泣いていた。まなじりから零れ出た涙はすーっと耳の方へと落ち、髪の毛へと吸い込まれていったのが分かった。目を開けると、最近見慣れてきた板天井が見える。わたし、夢の中で再びあの舞を踊っていたのだわ……と那梨はどこかぼんやりと理解した。

東の方から高い鐘の音が聞こえてきた。中央の広場にある鐘は、始業と正午と、日没、終業の時刻に鳴らされる。どうやら、今は正午のようだ。昨夜は夜通しの酒宴が開かれていたため、官吏らの今日の就業は正午から日没までに短縮されている。

興奮冷めやらぬ神経と、少しばかり口にした酒のせいで、那梨が寝付けたのはいつもなら始業の時刻となるときだった。

ああ、まだ心の臓がどくどく言っている。

那梨は目を閉じて、深呼吸した。篝火の中、躍動する身体の韻律を鮮明に思い出すことができる。天と地と一体となって、風のように駆け抜ける感覚。時の流れさえ超えて、八つの時のわたしのところへ辿り着けただろうか。

と、思考しているところへ、部屋の戸が開いて、沐浴を済ませてきたらしい朱貴が入ってきた。

「おはよう、朱貴。いい朝ね」

「あら、起きてらしたの。とてもお天気のいい昼よ。あなたも清めてきたらいかが。気持ちがいいですわよ」

さりげなく朝を昼に訂正され、那梨は笑った。

「ええ、そうしようと思う」

那梨は、布団から這い出て行李の中から洗いたての衣と布を出した。ついでに、楊枝も使おうとがさごそと引っ掻き回してやっとのこさ見つけ出した。

「いってきます」

挨拶とともに戸を開けようと手をかけたとき、その戸が勝手に開いたので那梨は驚いて目を見張った。濃い緑の上衣が目に入り、慌てて後ろずさって礼をとる。
「顔をおあげください」
いつもは高飛車なはずの高官が丁寧に申し出る。那梨はひっかかりながらも上を向いた。初めて見る女官が手に巻物を持っていた。もしかして、と那梨の心の臓が一瞬止まった。
「太子殿下による本日正午付けの命により、以下の者を正四位の女官の位に叙す。礼朱貴」
「拝命つかまつります」
間髪いれず隣で朱貴の声がする。平穏を装っているが、嬉しさを抑えきれない調子である。那梨は、女官の頬高な顔を見つめた。
「相那梨」
「はい」
名前を呼ばれて那梨は返事をした。沈黙がその場を支配する。隣で朱貴が息を呑むのが聞こえたが、なぜだかは分からなかった。女官は那梨が一生懸命に息を詰めているのを見て笑った。
「貴下も女官になられたということですよ。相那梨様」
その言葉を聞いて、那梨はやっと事態が飲み込めた。この相那梨が正四位の女官に？
「一刻後より女官としての訓練を受けていただきます。準備を調えてお待ちください」
女官は、二人に礼をして部屋を出て行った。
「わたし、女官になったのね。しかも朱貴と一緒になれるなんて、夢みたい……！」
那梨は胸いっぱいになって朱貴を抱きしめた。
「嬉しいわ」
「おめでとう、那梨。あれ程、なりたいと願っていましたものね」
朱貴は、それだけ言うと抱きついている那梨を立たせた。
「早く湯浴みを済ませた方がいいと思いますわ」

朱貴は微笑んだ。
「いくら指導係の女官が従四位だからといって、目を付けられたら大変なことですわよ。訓練がてらいびられてしまうやも」
朱貴の言葉に妙な説得力を感じた那梨は慌てて湯殿で清めを済ませた後、里宇の寝起きする舎を尋ねた。里宇は宮中の食事を司る部にいるため、この時間は忙しいのだろう。その辺りは人の気配が全くしなかった。会えるとは期待していなかったが、里宇に早く知らせたい気持ちがはやる。調理場のほうへ少し歩いていくと、金物同士が触れ合う音や、指示を飛ばし合う音が近づいてきた。そーっと倉庫の陰から覗いてみる。井戸のそばで一様に若緑の衣を着た少女らが色とりどりの野菜を洗っている。しかし、里宇の姿は見えなかった。火を焚いている殿は更に奥にあるため、ここからではよく見えない。もっとよく見ようと額に手をかざし目を細めて身を乗り出した途端、肩を叩かれて那梨は飛び上がった。これだけ怪しげな行動をしてから後ろを振り向くのが躊躇われる。
「お嬢さま？　？なぜここにいらっしゃるんですか。料理の支度で忙しいこの時間に誰かに見つかったらどうなることか！　？？皆ぴりぴりしてますから否応なしに叱られてしまいます」
聞き慣れた長い口上。
「里宇！」那梨は勢いよく後ろを振り向いた。
それは、那梨が物心ついた頃から何回も聞いたあの調子だった。
「わたし、今日から女官なのよ」
その言葉に、里宇は持っていた葱の籠を手から落としてしまった。
那梨はすぐにそれを拾い集める。もともと泥が付いてたものだからこれから洗うつもりだったのだろう。
「はい、里宇」
と言って籠を手渡すと、里宇は極限まで眉毛を八の字にしていた。
「お嬢さまぁ……ほんとに、ほんとに女官になってしまうなんて！
？？奥さまにどう報告すればいいか、里宇にはわかりません。里宇は、昨日のお嬢さまの舞をみてそれで充分だと思ったのに、お嬢

さまはそれでは満足ではないんですか」
「そうね。満足はしたわ。だけど、それで終わりだとは思ってないの」
声にして発してみると、益々そうだという気になってきた。那梨は、舞に魅せられて舞を追いかけてきた。どうせなら、舞の高き所を目指したい。その先には何が見れるだろうか、と考えるだけで胸が躍る。
「里宇、家に帰りたいでしょう？　？？わたしがお母さまに書簡を出すからあなたからも頼んでみるのよ。わたしのことは大丈夫だから」
図星だったようで、里宇は言葉を詰まらせる。しかし、すぐに反論が飛び出してきた。
「いえ。里宇は奥さまの言いつけを最後まで守ります。奥さまは、宮でお嬢さまを見ていて欲しいとお思いのはず。だから、那梨さまが宮に留まるなら里宇も一緒に残ります。それが里宇の使命で里宇にできることのすべてです。……だから、里宇を厄介払いしないでください」
里宇の言葉尻がすぼんでいく。那梨は思わず里宇を抱きしめた。鍛えている那梨よりも柔らかくてすぐにも壊れてしまいそうな身体だ。
「あなたが居てくれて心強いわ。ありがとう」
「な、那梨さまぁ」
里宇が今にも感きわまって泣きそうなのが分かった。昔からこの子はそうなのだ。那梨はよしよし、と背中をさすってあげながら、心の中で我儘な主人でごめんなさい、と謝っていた。

妙だ、と思った。何がと聞かれたらはっきりとは答えられないけれど、那梨には何か違和感があった。
那梨と朱貴は再び戻ってきた女官に連れられて、今まで来たことのない場所に案内された。歩いた方向と時間からして、随分東の方へ動いたようだったが、ここがどこであるかは皆目見当がつかない。しかも、訓練が始まったのは良かったものの、その内容は問題だった。
始めは、後宮の官位の説明や、相手方に応じた礼の仕方の実践などで、那梨にも親しみのあることだった。しかし、最後に女官が掟として念を押した事ごとは、少し理解しがたいものがあった。
「指示や許可ある場合を除いては、部屋の外へ出てはなりませぬ。見習い女官を通じてこの女官に許可をお求めください。宦官であっても、国王陛下、太子殿下を除いて殿方と言葉を交わしてはなりませぬ。必ず、女官か下女を通してお話なさるように。朝の仕度を始める前には見習い女官にご体調をお伝えください。また、月の不浄のものがあった場合には、すぐにお申し出ください。忌みに入る仕度をしますゆえ。それから、夜、寝床に入ってからは一切声を発しなさいますな。最後に、お里帰りは年に二度限り。以上が官位女官としての心得でございます。お忘れなきよう」
……女官がこんなに窮屈なものだとは思わなかった。那梨はふかふかの布団の中でため息をついた。ため息は声のうちだろうか。そうだったら、寝床に入ってからはため息もつけないことになる。朱貴はどう思ったのか聞きたかったが、訓練のあと各々別々の部屋に案内されてから姿を見つけられないまま夜になってしまった。明日は舞の練習が始まり、他の舞子仲間と会うことになるだろう。そのためには早く寝なくては。那梨は無理やりまぶたを降ろした。
再びまぶたを上げたのは、「お目覚めくださいませ」という見習い

女官の声を耳が捉えたからだった。未だぼんやりとした視界に、黒い髪をひっつめて一本のおさげにしているあどけない少女の顔が入る。
「お加減はいかがですか」
ああ、そういえば、朝の仕度の前に体調を報告するのだった。
「何もおかしいところはないわ」
「それは麗しゅうございます」
見習い女官というのは、とても腰が低いようだった。今までは、下女に何か申し付けることはあっても見習い女官と関わったことがないから新鮮である。
気づけば、何人かの女官に取り囲まれ、桶の水で洗顔を施され、衣を替えられ、髪に櫛をあてられ、あれよあれよという間に化粧まで終わっていた。途中、何回もやめて欲しい旨を述べたがすべて黙殺である。さすがの那梨も折れてしまった。
「あの……、朱貴に会えないかしら」
駄目元でも、これは言っておきたかった。見習い女官は動きを止めてこちらに礼をする。
「すぐにご面会となるかは分かりませんが、斉さまにお伝えします」
やっとまともに応答があったので、見習い女官らが口を聞けないのではと
憂慮していた那梨は安心した。しかも、朝餉が終わってすぐに朱貴の部屋へ案内してもらえたので助かった。
朱貴の部屋も那梨と同じような造りになっていた。両開きの戸を開けると、衝立が見える。それを回ると、手前に円卓と椅子がふたつ、奥には寝台が据えられている。那梨が訪ねたとき朱貴は、物憂い仕草で茶を飲んでいた。どことなく顔色が悪い。訪問は控えたほうがよかっただろうか。
「おはよう、朱貴。どこか調子が悪いのなら、わたし退散するけど」
「たしかに、今あんまり気分はよくありませんの。でも少し位なら

お話しできるわ。お座りになって」
朱貴の勧めに従い、もう一つの椅子に腰掛ける。朱貴に付いていると思われる見習い女官が那梨の分のお茶を出してくれたので、一口すする。爽やかな酸味のする味わいで那梨が飲んだことのない茶だった。
「昨日の夜は良く眠れました？」
「おかげさまで。ぐっすりだったわ」
那梨が答えると、朱貴はこちらをじっと観察するように見つめてきた。
「何か顔についてるかしら」
「いえ。顔色が宜しいと思っただけですわ」朱貴は小さなため息をもらした。
「あなた、あの雁字搦めの掟に縛られて元気をなくしてるのではなくて？　？？わたしは、あれに慣れそうにもないわ」
那梨はさらにお茶を啜る。中々癖になる味かもしれない。
「まあ、あなたは面白いことを言うのね。正四位の女官ならこれくらいは、当たり前のことよ。慣れなくてはいけませんわ」
朱貴が口角をあげて笑う。那梨はそれを聞いて少しばかりがっかりした。どうも那梨の悩みを共有できそうにない。
「わたくし、なんだか気分が優れないの。折角来てくれたけど、帰っていただいて宜しいかしら」
朱貴の棘を含んだような言葉に若干驚きながらも、那梨は暇を告げるしかなかった。
なんだか、那梨は急に自分が取り残されてしまったかのような不安を覚えて仕方なかった。

「これより寝所に参ります。わたくしについてお進みください」
夕餉を終え、湯浴みも済ませ、あとは寝るだけに調えたとき告げられた女官の言葉に、那梨は首を傾げた。寝所といっても、今自分がいるこの場所が寝るべき所、寝所ではないのか。

那梨は、その疑問を女官に質すのは気が引けて、何も言わずついて行った。いくつかの渡り廊下を通って辿り着いたのは、那梨が今まで見たことのある寝室のどれよりも大きい、まさに寝所だった。人が四人は並んで寝転べそうな大きい布団が、一段高くなった所に敷かれている。布団の縁には金糸で豪奢な刺繍がほどされ、那梨の目からも一級品であることが分かった。周りには衝立が立てられており、そのついたての陰には濃い緑の衣を着た女官と、宦官を示す黄緑の官服を着た男が数人座っていた。あまりの仰々しさに那梨は思わず後ずさったが、女官の一人に支えられて、布団の上に座るよう指示される。いよいよ、おかしい。那梨の頭の中で、高い鐘の音が繰り返し響いている。わたしは何かとんでもないことをしでかしたのではなかろうか　。

「わたし、こんなところでなくても、自分の部屋で充分です。帰りましょう」

座った那梨は女官の顔を見上げる。と、かつてない程厳しい声が飛んだ。

「なりませぬ」

有無を言わせぬその勢いに那梨は肩を震わせた。

「夜が明けるまでこの台から下がることは許されません。外に控える宦官らに引き戻されたくなくば、静かに居てくだされば よいのですよ、那梨さま」

取り付く島もない。気づけば大きな灯りは消され、部屋の四方に小さな灯火のみが明かりになっていた。

薄暗闇の中、那梨は一歩も動けずそこに居た。宦官らに捕まるなどあってはならぬことだ。那梨はまだ生娘で、父親以外の男に触れられたことがない。

しかし、那梨が危惧することは別の所にあった。今日も一瞬たりとも舞を踊っていない。女官に選ばれてから一度たりとも。

「おかしいわ」と、呟いた那梨の声は、外からの声に掻き消されて誰の耳にも届かなかった。

「殿下がお渡りなされる」
その科白は順に復唱されていく。
ぽかんとした那梨が、いよいよ決定的に自分の置かれている状況を認めざるを得なかったのは、衝立の向こうから、宦官ではない男が姿を現したときだった。この宮の中で、宦官ではない男とは王族の者か、王族の乳兄弟しかいない。
白地に青の刺繍の衣の上に、鮮やかな赤い生地に金糸どりの刺繍の上衣を重ねたいでたち。まだ皺のない若い精悍な顔立ち。それらを見れば、目の前の男は一昨日即位したばかりの太子殿下に違いなかった。
那梨は、慌てて顔を伏せた。太子の顔を正面から見つめるなど、場合によってはお咎めがくだる。
「おもてを上げよ」
そう言われて、那梨は恐る恐る顔を上げていった。
「この顔だ。俺が見た龍鈴謡を踊っていたのは」
那梨は問い質したいことがいくつか思い浮かんだがどれもうまく言葉にできず、黙っているしかできなかった。
「女官になりたがっていただろう。女官になった気分はどうだ。俺はあまりオススメしない職業だが、中々人気はあるらしいと聞いている」
いや、たしかに、女官になりたくて仕方なかったのは事実だ。しかし、こんな、太子の寝所に侍るなど、一切望んだことはない。那梨が望んだのはこんなことをするためではない。
そう言いたくて、言葉が喉元まで出かかったが、済んでのところで理性が打ち勝った。太子に下手に言葉をいうと反逆罪にもなりかねない。那梨は唇を噛んだ。
「今夜はお務めご苦労」
と言いながら、太子は一番上に羽織った赤い衣を丁寧に脱いだ。下の薄い白地に青の衣は、太子の骨と筋肉が多い体幹を強調している。
那梨はくらくらとしてきた。どうすればいい。どうすれば逃げられ

る？
とっさに逃げようと立ち上がりかけた那梨は、がっしりとした腕に絡めとられて身動きが取れなくなった。
「下手に動くと大変なことになるぞ。お願いだから大人しくしていてくれよ」
太子の声は那梨のすぐ近くから聞こえる。那梨は自分の顔に血が昇っていくのがわかった。
「この衣を持っていろ。これで明日の朝、女官に何も言われずに済むから」
太子はそれだけ言うと素早く立ち上がって衝立の端から姿を消した。
豪奢な布団の上には、呆然と座り込む那梨と、これまた豪奢な赤い衣だけが残された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2841i/

風の舞

2010年11月16日10時14分発行